

ある。

共和暦三六七年。

戦死者のいない激戦場で、戦死者にカウントされない部品扱いの兵士達が、今日もひたすらに死に続けている。

十

〈レギオン〉の赤のブリップが東——彼らの支配域の方向へと撤退していくのを確認して、レーナは少し緊張を緩める。

一方第三戦隊の損耗数は七機で、苦いものが胸中にこみ上げる。七機の〈ジャガーノート〉全てが、その中のプロセッサごと爆散した。生存者はいなかった。

〈ジャガーノート〉——インテリ気取りの開発者が、古い神話から取った異邦の神の異名。

救済を求めて集う数多の人々を、その戦車の車輪にかけて轢き殺すという。

「……ハンドラー・ワンよりプレアデス。敵部隊の撤退を確認しました」

一息をついて、〈プレアデス〉のプロセッサに——自分と家族の市民権復活を見返りに五年の従軍に応じたエイティシックスの操縦士に、知覚同調を介して言った。

聴覚を同調して互いの声や聞いた音を伝え合う知覚同調は、距離や天候や地形の影響を受けやすく阻電攪乱型の電磁妨害にも阻害されやすい無線通信を過去のものとした、画期的な通信手段である。

理論上、五感のどれでも同調できるが、基本的には聴覚が利用され、それは視覚では情報量が膨大過ぎて使用者への負荷が大きいためだ。その点、聴覚なら最小限の情報量で状況が把握できる。体感的には無線や電話と大差ない分、混乱も少ない。

ただ、それだけではないのだろうとレーナは思う。

視覚を同調しなければ、見なくてすむ。眼前に迫りくる敵の威容を。すぐ隣の仲間が機体ごと吹き飛ばされる無惨を。引き裂かれた自分の体から零れる、自らの血と内腑の色を。

「警戒任務は第四戦隊に引き継ぎます。第三戦隊は帰投してください」

『プレアデス了解。……今日も遠眼鏡で豚の監視ご苦労様です、ハンドラー・ワン』

皮肉な響きは終始消えないプレアデスの応答に、目を伏せた。

嫌われるのは自分が白系種で——迫害者の一員である以上仕方ないとわかっているし、ハンドラーの役目の一つがエイティシックス達の監視であるのも、本当のことだけれど。

「お疲れ様です、プレアデス。隊の皆も、亡くなった七人も。……本当に、残念です」